

3) 果 樹

なし幸水の弱小枝の予備枝利用について

1 試験のねらい

えき花芽を着生させるための幸水の予備枝は、基部の直径が8mm以上の新しょうが良い。しかし樹冠先端部は強い新しょうの発生が少ないので、優良な予備枝をとれない場合が多い。そこで、弱小枝を予備枝として利用する場合の取り扱い方を昭和58年に検討した。

2 試験方法

栃木農試ほ場の17年生の幸水10樹を供試し、基部の直径が7.9mm以下の新しょうを1/2に切り返した区と、切り返さない区を設け、発生した新しょうの長さ及びえき花芽着生率を調査した。予備枝はせん定後に40~45°に誘引し、対照として基部の直径が8mm以上の新しょうも1/2に切り返して供試した。また、予備枝から数本の新しょうが発生した場合には、先端部の生育の良い新しょうを1本選んで調査した。

3 試験結果及び考察

予備枝の太さ及び切り返し程度と新しょうの発生との関係は表-1のとおりで、翌年長果枝として利用できる新しょうの発生は太い予備枝ほど多く、7.9mm以下の予備枝では1/2に切り返した場合でも、翌年長果枝として利用できる新しょうは約50%しか発生しなかった。また切り返さない場合には、更に翌年利用できる新しょうの発生が少なく約30%であった。

7.9mm以下の予備枝について、予備枝として使用した新しょうの長さとの関係をみると、太さが同じ7.9mm以下であっても、50cm以下の長さの新しょうを予備枝にした場合は、切り返しの有無にかかわらず約50%から翌年利用できる新しょうが発生した。しかし新しょうの分類で「優」の枝は、1/2切り返して多かった。また51cm以上の長い枝では、1/2に切り返した場合は50cm以下の枝と同様に約50%から翌年利用できる新しょうが発生したが、切り返さない場合は翌年利用できる新しょうの発生が8%と特に少なかった。

1/2に切り返した予備枝の太さ及び残した長さで発生した新しょうの関係は図-1のとおりで、同じ太さの枝を1/2に切り返した場合には、

表-1 予備枝の太さ及び切り返し程度と新しょうの発生

予備枝の太さ mm	切り返し程度	供試枝数 本	発生した新しょう別の予備枝数 本			
			優	良	中	不良
4.0 ~ 7.9	1/2	88	26 (30)	5 (6)	14 (16)	43 (49)
	0	56	6 (11)	8 (14)	3 (5)	39 (70)
8.0 ~ 9.9	1/2	135	64 (47)	2 (1)	25 (19)	44 (33)
10.0 ~ 15.4	1/2	107	63 (59)	0 (0)	23 (22)	21 (19)

注1. 新しょうの種類

優：80cm以上で花芽率50%以上
 良：60~80cmで"
 中：80cm以上で花芽率30~49%
 不良：その他…使用できない

} 長果枝として
 使用可能

2. ()内は比率%。

残した長さと同様に翌年使用できる優良な新しょうの発生には一定の傾向はみられなかった。しかし、太い予備枝ほど優良な新しょうが多く、特に7.0 mm以下の細い予備枝では優良な新しょうが少なかった。

以上のように、基部の太さが7.9 mm以下の弱小枝でも、1/2に切り返した場合には約50%から翌年長果枝として使用できる新しょうが得られた。予備枝として使用した枝の長さが50 cm以下の場合には、切り返さないでも約50%から翌年使用できる新しょうが得られたが、優良な新しょうは1/2切り返しの方が多かった。したがって、弱小枝でも予備枝として利用する場合の扱いは1/2に切り返すのが良いと考えられる。

しかし、予備枝としては太いものほど優良な新しょうの発生が多く、特に7.0 mm以下の細い枝では優良な新しょうの得られる確率が低いので、7.0 mm以下の枝は直接予備枝にしないうで、一担切り返して太い新しょうを発生させ、それを予備枝として利用するのが良いと考えられる。

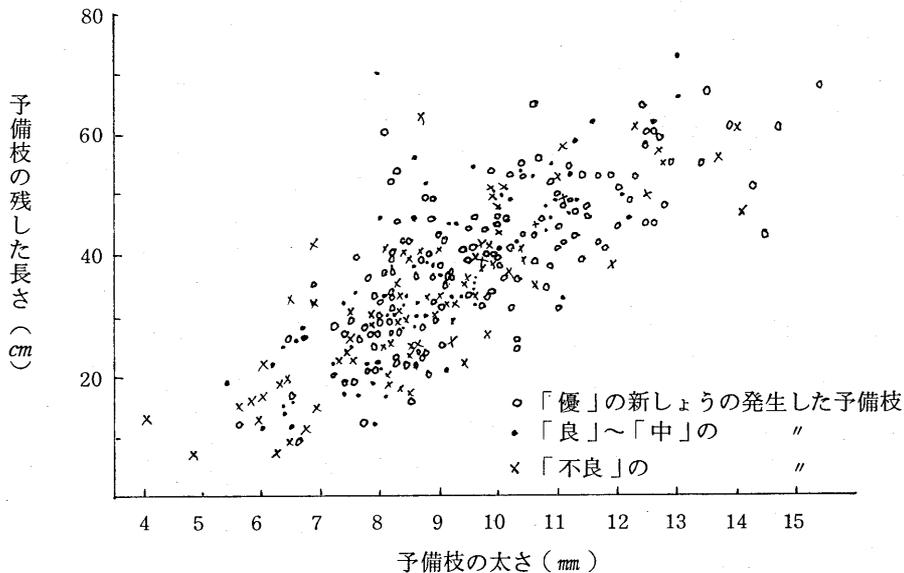


図-1 予備枝の太さ及び残した長さと同様に新しょうの発生(1/2切り返し)

4 成果の要約

基部の太さが7.9 mm以下の弱小枝を予備枝として利用する場合の取り扱いも、太い予備枝の場合と同様に1/2に切り返すのが良い。しかし、7.0 mm以下の特に細い枝は直接予備枝にしても良い新しょうの得られる確率が低いので、一担切り返して太い新しょうを発生させ、翌年それを予備枝として利用するのが良い。

(担当者 果樹部 金子友昭)